

校 園 名： 愛媛大学教育学部附属中学校

所在地：〒790-0855 愛媛県松山市持田町1丁目5-22 電話番号：089(913)7841

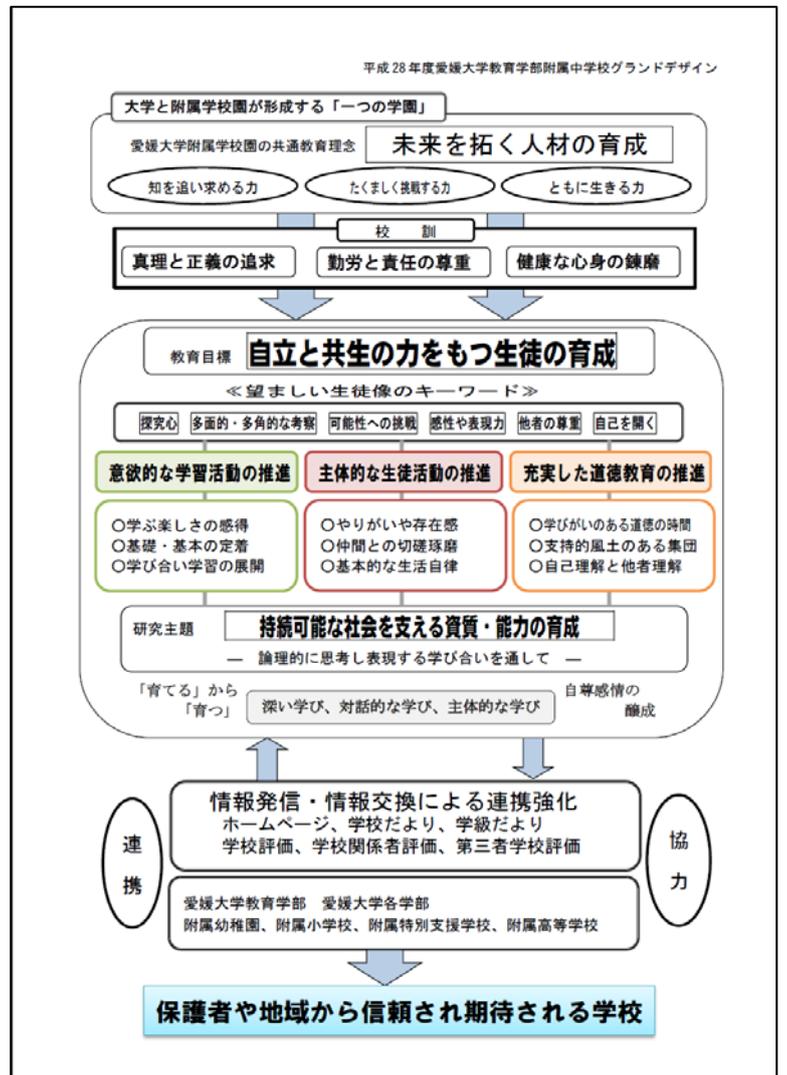
記載日：平成28年5月10日 記載者：渡部 ゆかり 記載者役職：副校長

貴校の校風、おおまかな特色について：

愛媛大学附属学校園は、附属高等学校、教育学部附属幼稚園、同小学校、同中学校、同特別支援学校の5校園からなり、それぞれに長い歴史と伝統を有し、自由闊達な精神のもと、人材育成や研究実践において多くの成果を上げてきた。

旧愛媛師範学校の附属として、戦後、教育学部の設置を受けて生まれた中学校は、義務教育に関する先進的な研究実践を行い、その成果によって、地域のみならず国のレベルにおいても、先導的な役割を果たしてきた。

5校園共通の教育理念として「未来を拓く人材の育成」を掲げ、「ともに生きる力」「たくましく挑戦する力」「知を追い求める力」をつけるため、子どもたちがともに学び合う授業を展開し、学校内外での多様な実体験や、さまざまな人々との出会いから学ぶ機会を豊富に提供している。また、5校園が近接しているという恵まれた環境を活用し、附属学校園間や大学との連携を積極的に行う。



貴校の卒業生の活躍状況について：

追跡調査は実施していないため、正確には把握できていないが、総合的な学習の時間の中で実施しているキャリア教育において、県内外で活躍している本校の卒業生が講師を務めている。「ようこそ先輩！働く人に学ぶ20講座」と題して、毎年さまざまな職業に就く卒業生が働く意義や喜びを後輩に伝えている。

貴校勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について：

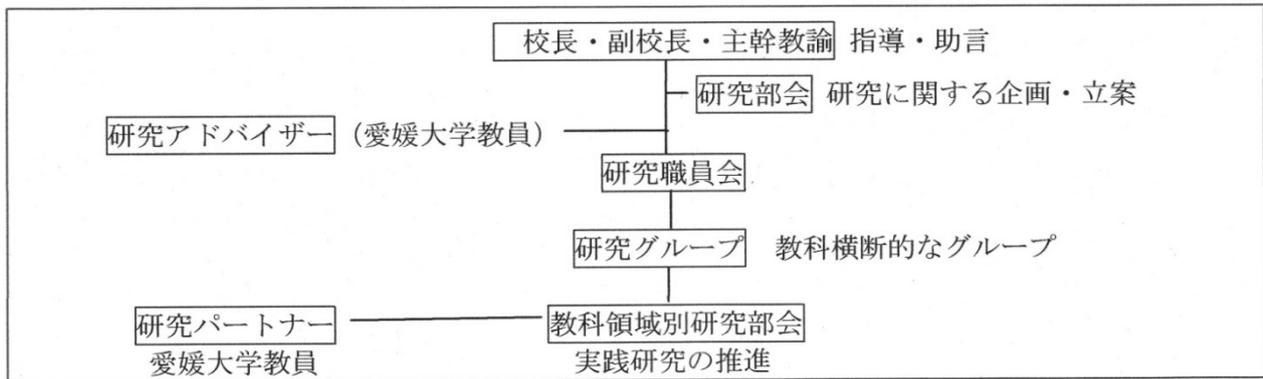
追跡調査は実施していないが、本校勤務中より愛媛県の小・中学校の教員が所属する研修団体、愛媛教育研究協議会の各教科の事務局を担当するなど、地域の教育研究に貢献しているため、転出後も教科の中核を担い、管理職や指導主事として指導的立場で活躍しているケースが多い。

## 魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて

自立と共生の力を有した生徒の育成をめざして、授業はもとより、探求（総合的な学習）・附中祭（文化的・体育的行事）・部活動等の活動において、生徒の主体的取組による学びを推進し、それぞれ成果を上げている。また、地域の教育研究の拠点校として、大学との共同研究、ESD の視点を生かした実践研究を推進し、研究大会等によってその成果を発信している。愛媛教育研究大会の開催数は本年度で96回になり、毎年約500名が県内外から参加している。

### ① 大学との共同研究

本校では以下の研究体制によって、大学との共同研究を進めている。



学校全体の研究に関わる、研究アドバイザーには、生徒の実態調査の質問紙の作成や分析を依頼したり、学校全体の研究の方向性について吟味・検討したりしていただいている。これのもと、本校では、一人一人の教員が1名以上の本学教員（研究パートナー）と共に研究実践を進めている。そこでは、本校の研究主題の達成を視野に入れながら、「すべての生徒が伸びるアクティブ・ラーニング」を具現化すべく、学習指導方法等の研究開発を行っている。以下に研究成果の例を示す。

- （国語）他者の学習成果を活かし合う学習指導方法の工夫
- （社会）多面的・多角的に追究させることのできる教材や学習課題の開発
- （数学）問題解決に粘り強く取り組むことができる題材の開発及び学習指導方法の工夫
- （理科）探究意欲を継続させる学習課題の設定や学習指導方法の工夫
- （音楽）学習した内容や技能を活用する教材選択や題材構成
- （美術）ICTを活用したビジュアルコミュニケーションの在り方
- （保体）内発的動機を高めるための単元構想図の作成
- （技術）共有情報から学び合わせるためのコンテンツマネジメントの開発
- （家庭）思考の過程や結果を見取りやすくするワークシートの開発
- （英語）自律的な学習者を育てるためのCAN-DOリストの検討
- （行く河）アサーショントレーニングや傾聴トレーニングの開発



これらの研究成果は、本県で発行されている教育機関誌等に掲載するなどし、多くの先生方に活用していただけるよう、情報公開に努めるとともに、ワークシートや資料の提供等も積極的に行っている。また、各教科等の勉強会を本校で実施することも多く、そこでも共同研究の成果を発信することにより、多くの先生方に参考にしていただくことができている。なお、「行く河」とは、生徒の自立の心を育てることをねらいとし、教育心理学の理論的・実践的アプローチを教科横断的に学習させるものであり、教育心理学を専門とする大学教員から助言をいただき学習を構成している。そこでは、「いじめ防止プログラム」などを開発・実践している。

## ② ESDの視点を生かした実践研究

愛媛大学教育学部附属学校園では、「未来を拓く力の育成」を共通主題として掲げ研究実践を進めている。本校ではこの「未来を拓く力」を「持続可能な社会の形成に向け、主体的に行動できる力」と捉え、これまで3年間、ESDの視点を活かした学習活動について実践研究を進めてきた。3年間の成果は次の通りである。

研究年次	○ 研 究 方 法 ◎ 研 究 成 果
1年次	<p>○各教員が、研究主題を具現化し、研究テーマを設定する。一つの研究に対して、教育学部大学教員1名以上と共同研究を進める。</p> <hr/> <p>◎各教科等の目標や内容を吟味・再検討し、ESDの視点から捉え直すことができた。</p> <p>◎ESDの理念・本校生徒の実態を踏まえた育成すべき「自立」と「共生」の力（以下「自立」と「共生」の力）を明確にすることができた。</p> <p>◎「自立」と「共生」の力を育む上で効果的な学習指導方法を明らかにした。</p>
2年次	<p>○1年次の研究成果と課題を集約し、学校全体としての研究の重点目標を決め、焦点化していく。これを基に、研究の深化を図る。</p> <p>○各教科領域の研究テーマに対する評価を行い、研究をよりよいものにしていくとともに学校の研究主題に対する研究の評価内容や方法を検討する。</p> <hr/> <p>◎本校生徒の実態から「自立」と「共生」の力を育む上でさらに指導の効果を上げるための要素を明確にした。</p> <p>◎「自立」と「共生」の力を育む上で有効な指導と評価について研究が進み、研究・実践におけるPDCAサイクルが充実した。</p>
3年次	<p>○2年次の研究成果と課題を基に、さらに研究の深化・統合を図る。</p> <p>○学校の研究主題に対する研究の評価を行う。</p> <hr/> <p>◎ESDの視点を踏まえた質の高い学習指導が各教科領域で実践された。</p> <p>◎ESDの視点から、生徒の確かな育ちを保障する上で重要となる事柄を明らかにした。</p>

また、「主体的に行動できる」生徒を育成するためには、本校のあらゆる教育活動を通して、自尊感情を醸成することが大切だとの考えから、生徒同士が互いの自尊感情を醸成し合う学び合いを創造することにも力を入れ、着実に成果を上げることができた。これらは、ESDの目標に掲げられた価値観や行動の変革に資する成果であると考えている。これらについては、研究大会や研究報告集及び本校のホームページで広く公開している。

なお、今年度からは、ESDの視点に立った学習活動をさらに充実させるため、「言語技術教育を取り入れた授業実践」や「パフォーマンス評価を活かした単元構成」の開発に力をいれ、「思考力・判断力・表現力を育む言語活動」や「資質・能力を育てる教育評価」の充実に向け、取り組んでいる。「言語活動」や「評価」の在り方については、関心の高い教育テーマであることから、本県の先生方のニーズに応える実践研究を進められていると考えている。これから着実に研究実践を積み重ね、多くの先生方に活用していただける質の高い成果をあげていきたい。



## 地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか

附属小学校からは連絡入学を実施しており、他の公立学校と同じように小中連携で子どもを育てている。学習面だけでなく、学校が抱える問題も公立学校のモデルとなるよう多面的・多角的な研究に取り組み、教育ニーズに合った研究を実施し、研究成果を還元し、地域の教育の拠点校としての役割を担っている。

また、愛媛大学の附属学校園の教員組織は、県の教育委員会から派遣された教員を中心に構成されており、一定期間の勤務を経た後は、県下の公立学校園に戻り、学校の中核を担うリーダーや管理職として活躍するケースが多い。附属学校園での勤務期間中は、大学の教員との共同研究や毎年の研究大会の開催などを通して、最先端の教育研究を推進している。地域における教員の資質向上に資する存在である。

## 附属学校の存在意義、貴校の存在意義について

### 1 地方における教員養成を中心に担う

幼稚園や小中学校の教諭は、地域における基礎的な教育を担う人材であり、教員も地元出身者の割合が高いのが現状である。地元の国立大学教員養成学部に進学する教員志望の学生は、ほぼ地元の教員を目指しているといっても過言ではない。地元の国立大学が地元の教員養成を中心的に担うのは、地方国立大学のミッションの一つである地域貢献の最たるものであり、地方国立大学の存在意義を表す役割と言えよう。教員養成のためには、教育現場での実習が必要不可欠である。教員養成学部では、毎年まとまった数の学生に教育実習を履修させねばならないため、それを受け入れる実習先としての附属学校園の存在は非常に大きい。とくに県内における実力ある若手教員や経験豊富なベテラン教員が集まる附属学校での実習が、将来地方における教育を担うことになる教育学部の学生に与える影響は計り知れないものがある。また、即戦力となる教員を養成するために、愛媛大学教育学部の附属学校園では、観察実習やプレ教育実習の他、研究大会や各学校園での研究授業等、教育学部の学生が参加できる現場体験を複数用意しており、教員養成系学部における実践教育の部分を担当する重要な場として機能している。

### 2 地域における教員の資質向上

今年度より愛媛大学の大学院教育学研究科に、教育実践高度化専攻（いわゆる教職大学院）が設置され、現場のリーダーを養成する役割を大学院がより積極的に担うことになった。今後は現場との協力のもと、大学院教育を進めていく上で、教育・研究フィールドとして、附属学校園の有効な活用が見込まれる。教育学部における附属学校園の存在価値は、今後ますます高まっていくものと思われる。

### 3 現場教員と大学とが一体となった最先端の研究の推進

国立大学教員養成系学部が、地方の教育を担うセンター的な存在であるためには、学校教育現場との連携が不可欠である。現在日本にある教員養成系大学ならびに教員養成系学部が附属学校園を併設しているのは、学校教育に関わる最先端の学問と現場での教育実践とを密接に結びつけ、地方や国における教育レベルを向上させるための推進力とするためである。もちろん地方公立学校においても、研究の推進は可能だが、公立学校には公教育を担う役割があり、研究の実践の場に特化する場ではない。その点、附属学校園は大学の研究機関という位置づけであるため、大学教員と現場の教員とが連携しやすく、最先端の理論を実践する場としての役割を十分に果たすことができる。